

蕉芭

後

句

集

上下

911.32

八

上・下

芭蕉 三 蕉 發句集  
 代東都 誠信閣梓

冊一

發句

春



伊勢の妻の家も来たり今如の妻  
 庭前の世来語の文庫よる今如の妻  
 元日やおくり人を淋し秋のふき  
 元日は田舎とけ日こそ急しはれ  
 冬霜は心こそ女の松かさ  
 春もや新年ももふふ菜ふ外  
 誰ぞを遠くよはれせうしはれ  
 風雪もももも心月小袖を解るはれ  
 許さるはれは 似たり今如の妻

受



香たけしきけなれども海のこぼれしと元日重よ  
二日あもぬうらむしけ花はなまふ

季吟動をき段

風麦亭 春まきくまのまの 柳心うれ

却ちうまのまのまのまのまの

薦をたて誰人のまのまの花はなま

柳政にまのまのまのまのまのまのまのまの

大僧徒のまのまのまのまのまの

高きまのまのまのまのまのまのまのまの

歌をよて賑ふまのまのまのまのまの

とくくや精まのまのまのまのまの

人もまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまの

子日まのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまの

四方まのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまの

まのまのまのまのまのまのまのまの

山をよまのまのまのまのまのまのまの







一本のうらみ

ゆきあきは一日とゆつー梅はくれ  
細代氏神は身よりして

園女あて

梅のまふ程やうり来や梅はくれ  
暖簾はせりのゆつーいけうあ  
ひて〜に万葉おそ〜梅はくれ

卓盛亭  
月結

月結や梅うさけゆ〜小山も〜  
里け子の梅さうのあせう〜は靴  
まもやけ〜た〜は〜月と梅  
と来のも〜人けるか〜ひつ〜は〜

草花は〜みとす〜梅はくれ

梅うさまの月とけゆる〜は〜  
何系新のま〜は〜月とけゆる〜は〜  
何〜は〜梅はくれ〜は〜

梅うさまむ〜は〜一字何〜は〜  
う〜は〜は〜は〜は〜は〜  
紅〜は〜は〜は〜は〜は〜  
乙あう江戸へおもむ〜は〜

梅うさまむ〜は〜は〜は〜は〜  
う〜は〜は〜は〜は〜は〜  
か〜は〜は〜は〜は〜は〜  
梅は〜は〜は〜は〜は〜



寄るを 魂を 祈りし 嬌柳

けしき 入の ちの けしき 柳 けしき 入の けしき

八九 留 留て あり 柳 うれ

傘 又 押 分 あり ちの や な む ら れ

轆轤 あざな ちの けしき や な む ら れ ちの けしき

二月 ちの けしき ちの けしき 望 月

宗門 宗波 初御 せん と 旗 ちの けしき

暗杜風 ちの けしき 柳 けしき 旗 ちの けしき

ちの けしき 清水 ちの けしき

凍 ちの けしき 旗 ちの けしき 清水 ちの けしき

尾 柳 轆轤

表 ちの けしき ちの けしき ちの けしき

ちの けしき ちの けしき ちの けしき

ちの けしき ちの けしき ちの けしき

香 坂 菴

ちの けしき ちの けしき ちの けしき

ちの けしき ちの けしき ちの けしき

ちの けしき ちの けしき ちの けしき

敷 山

何 堂 の 小 河 然 の 五 新 共 伴 ちの けしき

六 六 六 陽 東 亭 ちの けしき ちの けしき

ちの けしき ちの けしき ちの けしき



申の堂  
ヤル由

強研  
以全

好交けるの屑はすべし 味は苦く  
 けけりや平宋於けり子の屬果を  
 いしゆま結むつ事かきけりつりぬ  
 於ぬま梨は結むやふや一き  
 粉の交りて其ま 漸田はぬく  
 袖ますん田理の海そのひまをなま  
 藤ふすたぐ白魚もまを滑ぬま  
 曜や白魚まのりきり一す  
 黏の子は白魚おろり別うぬ  
 白うままのりあはれ社うふまぬ  
 白魚や思き月まのり法の相

苗別

規子園談

老慵

子埋り

二月堂にありて

蛸うりも油苦美老は 煮もせく  
 油苦汁の多経んやけを 油苦 挽  
 ねのけりや 煮ま食あて 油苦は海  
 二月堂にありて  
 ありたりやありりし僧の首の平と  
 是橋の刺髪して医つてはを聖人  
 初年より粉の別し 類うぬ  
 何物か 神垣やおりひもつけすは無像  
 神居のまをまて西の細まをひ増なけ行を此  
 一ひ 二白  
 裸ははまておろりたは嵐うぬ



何の本の音もあはれ自由もあはれ  
松やいせは 白子の店やし  
唐去は侍借しむむ 飛ぶ下り

名木亭

蝶はくまもり野中し日影の  
越ふくくまのせんぬか蝶  
蝶は烟の炭皮あゆみ屏おや糸  
古池や静といふ水のおと  
なうおの<sup>た</sup>静うたぬ平在うれ  
原中におあひつゝ人味香香  
お花をささるすうぬ 静うれ  
徳峠  
父母は頼りあひし雛子は恋  
と野中

いと静中妙松子や雛子は恋  
蛇くまを言を思ひしはは  
姨ふく味かきしはきく人うれ  
松は 静をねしそむく無  
蝶はほうて静くく室は味無  
若子とよ味くく人 嵐は菓  
善まきき口谷さけり紙草履  
田舎わん  
麦飯しやほくく無 猫は鳥

湖水眺望 辛味はねを花をを 樹 あはれ  
去らばあはれ樹人うらまふ



二 段よりこれ先けの麻の首  
等々金銀のたゞ 桂の如  
きと云ふもあはれけり花桂  
折しの賛 け 桂のむし 桂を木の末  
大けよと云ふもあはれ

心持をいかにやと云ふもあはれ  
呂元々 桂のむしをいかにやと云ふもあはれ

菩提心 山とけりけり 山とけりけり  
二乗軒 数つともき門もむしけり  
龍尚金より有職の人を侍らせ

あはれ名をまよひ 可成のわづらひ  
草金の画賛 花のむしをいかにや 破まじり

木常は情をわけていかにや  
花柳のむしをいかにや  
任る方ハ人よりいかにや 別整よりいかにや

あはれ西岸寺は任はれ人よりいかにや  
我 花のむしをいかにや 桂の末

尚白のむしをいかにや

只一花のむしをいかにや 本情をいかにや  
花のむしをいかにや 其有る所をいかにや



支那の松と栲や草の如  
形くくは錦くくくくは栲の如  
咲みくは栲の中と初さく  
中と栲の如くくくくくく  
伊予の上野善師寺初會

初さくくくくくくくくくくく  
新くくくくくくくくくくく  
たぐくくくくくくくくくく  
あはれくくくくくくくくくく  
水くくくくくくくくくくく  
余くくくくくくくくくくく

山くくくくくくくくくくく  
と栲くくくくくくくくくくく  
探くくくくくくくくくくく  
さくくくくくくくくくくく  
あはれくくくくくくくくくく

栲くくくくくくくくくくく  
扇くくくくくくくくくくく  
栲くくくくくくくくくくく  
山家  
あはれくくくくくくくくくく



万平別冊

白雲の  
おぼろ

愛方知酒聖食始質錢神

吟行

木はゆふけも鶴もさうさのれ  
 直くや橋をさへは花は差  
 妻の表ハ橋はゆてあまひけを  
 古帯や花は藤山のいろむさ  
 妻の生の先さおゆー山ささ  
 うやまー夏世のわはさささ  
 阿蘭陀も花をさへけり馬と鶴  
 花より花より海白く飯思  
 世より花もとて佛の中けり  
 菜畑に花はうゆさる者うけり

物皆自得

草菴

親をけ覺んや川花  
 花はて七の鶴身も禁りぬ  
 花はけり蛇さうしそ友雀  
 鶴は原もさうあ花は葉うさ  
 花はや種のとや。出草お  
 聖と松の本さうや岩の老木はさうささうたのた  
 さささうさうさうさうさうさうさうさうさうさう  
 のあは聖さうさうさうさうさうさうさうさうさう

新竹菴は練をさうさうさうさうさうさうさうさう  
 淋ーさ花はさうさうの聖さうさ  
 多法も花はさうさう七さう  
 新竹菴は練をさうさうさうさうさうさうさうさう



花巻宿より... 花巻宿より... 花巻宿より... 花巻宿より...  
花巻宿より... 花巻宿より... 花巻宿より... 花巻宿より...  
花巻宿より... 花巻宿より... 花巻宿より... 花巻宿より...

花巻宿より... 花巻宿より... 花巻宿より... 花巻宿より...

花巻宿より... 花巻宿より... 花巻宿より... 花巻宿より...

花巻宿より... 花巻宿より... 花巻宿より... 花巻宿より...

花巻宿より... 花巻宿より... 花巻宿より... 花巻宿より...

花巻宿より... 花巻宿より... 花巻宿より... 花巻宿より...

花巻宿より... 花巻宿より... 花巻宿より... 花巻宿より...

花巻宿より... 花巻宿より... 花巻宿より... 花巻宿より...



花堂橋よみあて

おもむね花やあふらねよの作  
珍頌の酒屋堂の記ありて

四もよき花吹いけり 湖の波  
屋浪のへりて清海一掃不電は獨居兼一掃好  
一をり人よいりおとて

飲めて急生せん 二外 楊

のりあて花は心二町の風 大紫園  
甫心はもとあて探雪の画けり翠は賛に

翠のやもおもおとけり 翠は賛  
孤名はもとけり行をけり

むく起に 清けの心向ひて

傷守吟

鶴は毛のまきあふもや花は香  
花は香く ありけり 花は香く

花は香く ありけり 花は香く

花見にとさす舟遊 柳 花

花をよむと 花は香く 花は香く

花は香く ありけり 花は香く

うらやまをいふ

飯見やあふよ浦りて 田 塚 守

花入や 一里おとく 小山 俊

と花は香く ありけり 花は香く



青小くたのまきまほくならかたは好松晴きたのみて

口より又雲の梅もぬ花見えんわうか

文考東御  
例別

はあうろ推せよいたよ又兼一具

二部  
の無

花子群り羽織着てかざれ柱ん女

志はしは尻もすいしねまはりの

場場もあようきせは花にとも

論はあし維子腰なりく銭はて

路通うみまはりに整くると

草花はあまは花更しそも草

屋はあまをを種屋を腰まきけて

躰一躰してそは陰より干膝さく女

五言

舟渡市

橋よりや中をくあとき夕流し

名いしあまそ日たあかるとけよ

花外て宿りあうりやあちけり

山吹のあま葉はあまはあまを

あまはあまはあまはあまを

山吹や宇治の焙炉の自さ

肉裏離人飛天曾は法字とや

物けあの坊やあまはあまを

芭蕉袖を先ゆくむ萩の二葉

やと瑞の友りや居は法別

五言



名所、海の 岡ふれは風のそよふや わたしの浦  
 行 水やうらうらの海はなほ山伏  
 道場へ食たつ女 撥又倚  
 時早や花のささめを 羨みゆく  
 木曾 富の川 ねとやあじしの様 麻  
 舟なる雨や二葉のあふたし  
 舟のあふれ 舟風や人まきうくる 三笠山  
 舟風やし 雲のあやふり 人ゆうき 雲は偶  
 鐘つらぬ里にかなふを 雲はあ  
 舟まにまの舟浦ぞ 遠けたり  
 舟まにまの舟の舟ふりまらうて

舟まにまの舟

舟まにまの舟 舟まにまの舟

舟まにまの舟の舟まにまの舟

舟まにまの舟の舟まにまの舟

舟まにまの舟の舟まにまの舟



夏

舟ははま産ふりて船のほつたをさるる

夏夜いづれ風をさるるはるる

一ツ程てはらおひぬ 糸かく

ほつきいし月を梅は花さつて

清く写人耳は音短て 歌公

田々さひなをく 飛そつたを

はすさつた魚を細くてまおつたをほりて

けささつた飛ちうてはらみきとをふみて

さつたはをほまはらさつたをくはら 古戰場の歌

跡もあつてわらふ事なはらふとていふ飛ちんて  
むらうのまき得よ

ほつたは海はまをさるるは

ほつきいし月を梅は花さつて

舟ははま産ふりて船のほつたをさるる

夏夜いづれ風をさるるはるる

舟ははま産ふりて船のほつたをさるる

舟ははま産ふりて船のほつたをさるる

舟ははま産ふりて船のほつたをさるる

舟ははま産ふりて船のほつたをさるる

子規啼き春をさるる

視 糸



京あての京あてのうゝや 子規  
 子規 大行 散志のり月夜  
 木かくれて柔梅の雪や 杜宇  
 月こきり啼くや 尺牘あわや  
 萬賊うらむは 雨の音も 一  
 月こきり啼くや 尺牘あわや  
 月こきり啼くや 尺牘あわや  
 一 春のたけに 撲たつた月こきり  
 月こきり啼くや 尺牘あわや  
 曙や よろこびに 月こきり  
 おりのゆく 本堂や 月こきり

かなんぞ 鹿のさきうむきんをけいりおどきまひけ  
 瑞佛のりまうたれり 若のさへ  
 諸伴の ぬき合さる 散梅の雪  
 交まてきたり 一ツ葉のいと 繁うれ  
 櫻は 雪や 花おふ 蝶の 母 枝 峰  
 園は 昔大敷の 高きと 月夜と ぬ 近化し 雪  
 うし 流や 夢の ちとせと 夢の ちとせと 其角  
 かなんぞ 鹿のさきうむきんをけいりおどきまひけ

其角の 母の ちとせと 夢の ちとせと  
 柳の 雪や 柳の 雪や 柳の 雪や  
 柳の 雪や 柳の 雪や 柳の 雪や  
 柳の 雪や 柳の 雪や 柳の 雪や



年為やくき柳は及みー  
知不足をなめりて

かゝるはさしつゝは後白は花のいあり  
大坂まで商人のいもあて

あまのたのむるの 縁は 山崎  
山崎宗鑑やうまの近侍との宗鑑とすゝまな

わらひのいれはあまのまはらたつて  
まのいれはあまのいれはあまのいれ

あまのいれはあまのいれはあまのいれ  
白井ーや村女は花の咲はるむ

漁人の釣ちるまは花はあまのいれはあまのいれ

養は良才の見らるやけは花

あまのいれはあまのいれはあまのいれ  
伊豆けま輪々小嶋はあまのいれはあまのいれ

あまのいれはあまのいれはあまのいれ  
御いれはあまのいれはあまのいれ

あまのいれはあまのいれはあまのいれ  
甲斐の國はあまのいれはあまのいれ

あまのいれはあまのいれはあまのいれ  
あまのいれはあまのいれはあまのいれ

あまのいれはあまのいれはあまのいれ  
武府はあまのいれはあまのいれ



餘別れをいふをけり

まけ種をたうつゝも別々ぬ  
二度相葉さうもたにありて今もあへりてすた

ほしん葉さうもかゆる種はあつたれ

種極條新を自画自賛

まうゝぬあや 牡丹は花のま

招提寺少て幾真和尚は條 新をぬしは月は育させ  
たうゝ事をおひはけけ

まけ種をたうつゝも別々ぬ

便磨の浦一見のま

すはてゝた新ぬ葉さうも木下雲

雲岸香けおたに併須和南は山居のたう

木極も花をやうけ 五木を

石のやけ 國をさうもたう人け種たう葉あをけ住  
唐より小法居葉ぬは種はけとさうも種をたう  
ゆんも介月けあたらぬ

先たのむ種の本もあり 五木を

五木や枝にたうけ 一里のゆ

ね向け葉さうもたう種

法殿や 湯も 葉也 葉は種

法殿や 湯も 葉也 葉は種

甲斐  
山中

山々のおとめはさうも種

トコロ  
心火  
石花菜  
瑞暗菜



大煙の煙を思ふ時代も美勅もまたまゝに歴代人  
國は何もなきやう

函贊

落椿のぬきまをわきのうらまへにまを  
いたる事

聖母

教生垢

高敏

りんきんとなん人々習ふ交ぜられ  
想負ふ人々枝折れは交ぜられ  
石けりや交ぜられ高敏  
交ぜられ無きも、夢如あ

小傳やきにて

四夜むすひたる此川は産をまゝとす

竹けりやをきりてまゝに結のすき  
うき帯や竹けりてまゝ人の果  
ららひけり竹の子藪を老を啼  
能くけりけりたれ一我をけり子  
うき我を淋しけりてまゝ軍子鳥  
遠くまのひやうまゝにけりてまゝ  
我の帯を故のちひやうにけりて  
かつてを賣ひてまゝにけりて  
繩念を生てまゝにけりて



初之河を渉振舞衣の女はくも遠居ふ竹を  
くくくくくも活水の活き止むるも

桃

又趣人まねけ中山初之河を  
なななななななななななななななな  
日走山うくくくくくくくくくくく

あつゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
何くもくくくくくくくくくくくくくくくく  
りやちををををの編むくくくくくくくくく  
候まのいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
死んぬとくくく

花あや見一おまおけくくくくくくく  
傍ををををををををををををををををを  
をとめて什物くくく

ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
仙其まのいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ  
たり餅の餅餅餅餅餅餅餅餅餅餅餅餅餅餅

何やまの字はははははははははははははははは  
粽ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
経ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
髪ままままままままままままままままま  
まままままままままままままままままま



此書は... 月... 光堂...

光堂と七... 月... 光堂...

又月... 光堂...

又月... 光堂...

又月... 光堂...

又月... 光堂...

又月... 光堂...

又月... 光堂...

又月... 光堂...

又月... 光堂...

又月... 光堂...

又月... 光堂...

又月... 光堂...

又月... 光堂...

又月... 光堂...

又月... 光堂...

又月... 光堂...



やうくせん藜け杖よなきまはて  
香 浮や あり 再 終る 終ふの 光  
粟は未だ遠たのこして世を為し傳らう可件と  
世は人の足付ぬ 茶や朝の粟  
奉白しうりの武限のねをせし世をさしと  
勝別したるはね

橋よを ねら 二本を 三月あー  
此場茶の敷を小庭に別坐  
りもさるや 帷子とまはうりは  
高橋会 村は花にむうー 志はむ料理の  
徳川許六勝別 二句

推は花んあも似よ本堂け  
うき人け終るもかう人本堂け  
山中運商 登 嵐う油の扇さる 枕もや  
あけさういさむたなぬくく人もまはけるれや  
かいはさうり角さうりけし産の  
表よりさうり 荊をさしむね  
本堂の縁をおりいさむたはもとくはさる  
の雲目よ出て

あの内きふ田あとの月よさう人  
茶は茶をさるさるを 飛よ 茶うり  
せいの 望色 何さるふ見や 形 涙 辭て 是 茶 形



正妻白河あり

己う大達亦くけしやば 花けやと  
ききんれき首飾りつるき 堂へ入る

冥土にけ宿をきく難し 甲子おを

大は 御心亭 大は宿をきく難し 去るは 籠うれ

ききあうともかきあうとも 道おろしてともいふ白

氏う家よりかきあう

あ 難たうと人のいんもききあう

精細といふもの足付んと幕想あう

ききあう

まゝならい 長良の川の 能 能

橋をけりてさめさめさめさめ

おりんうてわうておりんき 橋 舟が

あをりんくおりんうたき 早 舟が

清水流るうけ橋をききあうたうて田は解に

のあうたうのいんあやとおりんうをけりては橋の橋

たうてさめさめさめさめ

田一お橋てさめさめ 橋 うが

奥あ今け白河よりうてさめ

子ああし我をききあう 橋 舟が

西うよあをききあう 早 舟が

あうあうの白河の奥よりあうさめさめ



風流のそとや都く田が夏に  
まはりのあそびをたのむるなり

ふきとるゝあそびや都く  
はま村一帯はともや田村

尾張まで舊文のあそび  
世を流す代り小田はあそび

羽黒山にあそびては鶴のあそび  
りつゝいかにあそび相はあそび

後田場本氏より

竹疎日  
は直にゆきまはるゝあそび  
はあそび竹疎のあそび

明名抄

増つるあそびはあそびは夏の月

月を見てあそびはあそびは夏の月

あそびはあそびはあそびは夏の月

あそびはあそびはあそびは夏の月

あそびはあそびはあそびは夏の月

あそびはあそびはあそびは夏の月

あそびはあそびはあそびは夏の月

あそびはあそびはあそびは夏の月

あそびはあそびはあそびは夏の月

あそびはあそびはあそびは夏の月

あそびはあそびはあそびは夏の月



いづやうし... 像

園... 像

佐ねおや...

命...

風瀑を...

破...

長...

屋...

す...

つ... 花...

夕... 小...

田... 飯...

那...



すししはるる風よるの 住居よれ  
竜の御 草は真草のすししけり  
雪のつらさ松葉は雪のつらさ

雪のつらさ松葉は雪のつらさ  
雪のつらさ松葉は雪のつらさ  
雪のつらさ松葉は雪のつらさ  
雪のつらさ松葉は雪のつらさ

茶菴よすくみ

雨思山  
雪は何處に捕る年月は短  
みかたや 雪まじかきし 南 谷

大山は像の湯人

風かきり 羽織る襟も つらさを  
きつぱや 風はうきをせし 相 抄子  
小倉山名 雲ききり

松林を ほかへや 風はうきをせし  
雪は空に 川 雲まじり 月は山  
山 名 雲を せし 雪はうきを  
本間 雲は 名を せし 雪はうきを

雪はうきを せし 雪はうきを  
雪はうきを せし 雪はうきを  
雪はうきを せし 雪はうきを  
雪はうきを せし 雪はうきを



夕顔の干瓢むいへ抱ひ事理  
屋敷の草搦まむむ 表たうり  
熱子は花はひりし抱ひ事屋敷  
子とともいふ屋敷のむいへむ  
李中の人と文は書後年

屋敷の草搦まむむの夜のみ  
河内松波をゆてきた長靴はんは花をむいへてむに  
吾等の群居をまきくつむいへるむいへるを松面  
下りてきたる

ありけの紀をいつかむむむむれくは  
梅葉山は松のむいへ

山のけや身をわくむむむむり  
初生草四つやむむむむむむ  
花と草と一気よむいへのむいへ  
ふあむ期あもつふはあむむ花  
梅葉のよまむむむむむむいへ泥  
柳あむむむむむむむむむ初生草  
我は似れ二つよむむむむ草あむ  
ありけ皮むむむむむむむ草草

正成像 鐵肝三下此人之情

梅子にむむむむむむむむ  
碎てあむむむむむむむむむ











秋

鴻海眺望

初秋の海は青白く一ひらき  
 初秋のたゞみさうくお故は秋  
 意海や佳清は横きよるの川  
 文月や六もきく秋はまじり  
 合款のすは秋のしんくもは秋  
 素堂は母七十余をすまは秋七月十日あきす  
 以万葉は七終を終るは

七株は秋の白布やほの秋

文月七の秋風をすにち白浪報はきくを



ひたして馬糞も糞糞をさう一袋握る好摩  
死に小冊けつれを懸てして

鳥水又早も縁高に岩のうへ  
七夕や秋を越さむるおれをいあ

何某は代友と遊ぶして河國の新人におも

七の如く 裸するは 俄 縁

名酒の月 けい合は井や絶れん三田所

加賀の如きをさうとて  
夕かゆやかいまらぬはれはれ

態取のゆりやの川 のお祭

本堂山の字菴裏所より遊

魂を流るるも焼畑に煙をれ  
尾上斎貞の身はあけをさうて

救うてぬ身とれおりのうむ系  
まじりやもさうておれまじり

舊里たのびてをさうておれ

一ふれこれ 救うてぬ身とれおりのうむ系

おれをさうておれまじり

おれをさうておれまじり

おれをさうておれまじり

を田けやいさめておれまじり

おれをさうておれまじり







昔は日副あつて

今ももや古昔の人を言ふ  
草菴 乃細一すまやう神の花はあ

あつてのうたはあつてのうた

昔一くたふすまをわがや  
う一かたにぬのうたをたはる  
あはれあつてのうたに神はあ  
しあつてのうたをわがや  
あつてのうたをわがや  
あつてのうたをわがや

秋すくすくあつてのうた  
あつてのうたをわがや  
あつてのうたをわがや  
あつてのうたをわがや

あつてのうたをわがや  
あつてのうたをわがや  
あつてのうたをわがや  
あつてのうたをわがや

和蘭菴書 昔は日副あつて



落しけり人々を廊の端に坐せしむる者もあはれ  
朝の海を海にさしぬるもの  
買実た後なり

朝の海や昼を顔若くしの  
暮れや星もほろひつゝ友たゞ  
終るはあつたの味ゆへ故の弱  
世にわたりて一かたやせしの  
松門をくぬる一かたやせしの  
たゞの心ゆく老を思ふもあはれ  
すゝまの世の初めはあつたの  
勢のつゝとて思ふもあはれ

一かたやせしの 朝と日  
小ねのつゝとて

紙の事雨の中  
あつた人々

画賛  
白雲もあつたの味ゆへ

あつたの味ゆへ

風はあつたの味ゆへ  
流のりやあつたの味ゆへ

東青を過る

新の種やあつたの味ゆへ



信川庵 芭蕉卿よりと嘯と面を可敷く

けちとて唐一たいのそやま

画賛 新巻やうのまをまをまを

いささくと程まけい

まののまよまをまをまを

まのまのまのまのまのまの

山一ひま

蘭のまやまのまのまのまの

いささくと 門よ入と履袂とまをまを

本曾塚村回をまをまをまを

まのまのまのまのまのまの

春とてもまをまのまのまの

かゝるまをまのまのまのまの

大風のあゝたとあゝ唐のり

夕々や林とらんくの孰く

一通もまのまのまのまのまの

花橙とまのりまのまのまの

八朝や天のまのまのまの

まのまの細川まをまを

茶園にいつまのまのまのまの

そいんくおのくまのまのまの

子榕のまをまのまのまの



嵐雪の國より来たもの

猪馬二百十口

むしけけ秩父殿へお披露

許六の夢 猪角口の川もとまよふ茶けり

角盤や裏さゆめは相撲を

三日月や鈴おけ夕へついでん

何事平にこころも似たり三日の月

三日月に地を踏むる萬葉の春

嵐雪の夢をさす

見しやそれたるを夢の三日の月

詠むるや江戸ふと移れぬの月

傳へば先月傳の遠近家より

杜牧の半行の跡を小ね中ふりて

馬よりふりて跡を月を茶は燈

月を甲一本来るあま 持たし

明後のや二十七の月

月をあやに海をふりて

の人をのふりてとて

甲のぬ身に入ると

りの中へ

文料のふりて

さす







正秀亭 初會

月やそれ細の本れ日のたゞ面

日代や接もをせり香れ月

鎖の午月より入し浮舟堂

葉のひらきやうらやを名もわらもせりあも

あそつらけしはれを東山の位けの借をめぐりあゆみの

ふたせはきひけりいなるほろもを先まはゆり

な川がゆれり

葉の戸の月やそれまゝうらや

石の流るゝ道ゆく

橋木の志れ六月は夕秋の如

月月のまほひおとせ芭蕉の心をきく

芭蕉の心をせりしつれん巻の月

流川のまほをねりつれんあま

川をそせり川より月をねり

舟の老人をゆりよけまゝと東の舟をゆり

入月の夜を机の口隅に水

川をゆりよけまゝと東の舟をゆり

月をそせりおとせりあま

舟の夜を机の口隅に水

月をそせりあまのあまをゆり

武蔵の東時に芭蕉の心をきく



四月廿四日 又十一首 條

名月や池をめぐりておひすり

根まきの 湯まかに せきふん せきと 湯着まきせむ

ちよとちよと 湯あふれ 湯あふれ 湯あふれ

ををりくくくを 休むる 月見の

坐臥をくくくくくくくくくくくくくくくく

一 沙水の橋をわたる 橋より 湯あふれ 湯あふれ

橋をくくくくくくくくくくくくくくくく

あふれ 月見の 湯あふれ のり

名月や池をめぐりておひすり

名月や池をめぐりておひすり

古寺夏月

名月や池をめぐりておひすり

名月や池をめぐりておひすり

名月や池をめぐりておひすり

名月や池をめぐりておひすり

名月や池をめぐりておひすり

名月や池をめぐりておひすり

名月や池をめぐりておひすり

名月や池をめぐりておひすり

名月や池をめぐりておひすり

名月や池をめぐりておひすり











同よりのさきやあつーの暖き  
しつと晴ちりき此一おの無  
棧や中何れおしい物ふ約むく

多摩川の漁火とて

舟火に河を舞や浪のきむむせ  
積とともはに 吹さく 野さくれ  
吹とぬれ石を流石の野さく  
はとれ彼馬をいほと風のきそ  
野さくしきんよ風のきむむせ  
富子河をいほと風のきそ  
橋をさく人捨るに秋の風いよ

いふへのさき盤を暖ちを何物のもさくいひけさめ  
風よ似るは秋風をいふと風のきそ

義朝のゆふゆふは秋の風  
秋のせぬおももむけもみ徳の雲

身はくそ大根じし秋の風  
堀もいあけさうほまきと秋の風

秋の風  
さくさくおとあまはひし川うら

那谷の八尋石とていひ古松梅かへて秋風の  
地形を

石の石をいふ一秋のいせ







梅夫の名をうけて

梅のまはそのもまらぬら 林の風  
秋風はいせは寒くくねす  
塵右は銘人の羅まうらふたれこまききんば事  
那うま

物づくを唇さぐり 林の風  
まきまうらまうらま何物に死びまうらうら  
おくま書つはま

西東のまらま甲 林の風

嵐の峰 林の風は折て折りまきまの枝

曲梨亭より 経夜寒

入麩は下まきまきまおめ  
張宅長夜 九夜起ては月の七つ  
くす 何某の條

車庸亭 百 秋のまをちまきたる 梨の風  
おりろま秋の節もや耳まうら

人ふまをうらま

世の中をま指折はま 子のいば  
秋のまをちまきま 梨の風  
川流のまをちまきま 梨の風  
くまうらま 梨の風



大和の玉竹の内にて

銚子や霞色をわくもむ井の奥  
百花の賛 杖を強く搦むかあまや菊はあ  
草庵は魚 起らふ菊田のふかき水の後

たかきも竹のふも正しきくけ元  
草花をばあまの菊を愛したのふは山の方ま

少はなれぬおまの菊をたわふまやあまの菊  
いさまのいつたると菊と菊と菊と菊

山中温水 山中や菊のふれくは湯の匂い

木因亭 かくは菊の月と菊の田之反

如行亭

瘦かろくもろのふも菊は合意の  
ふあふのさひしき菊を忘るれ  
重陽 菊は下り水や枯木 菊

九月の菊はあまの菊をたわふまの菊

菊は戸や目くはてくまの菊は屋  
見受けあまの菊をたわふまの菊

田の菊はあまの菊

縮あまの菊は味もめたの菊はあ

大門の菊をすまの菊

琴の箱や古物店の菊の菊

何れも木匠の亭にくもてかまの菊はあ



いと美しけれ

蝶も来 歌をすし 菊は能く

盛水亭

新まをく 菊は香のする 石廬

八町坂

菊は花咲や 石廬のいゝの間

花舞う 男の心をいふ 山家集の野をうへ

一 菊もあはれさぬ 菊は氷くれ

菊は香を散て しろくさぬうら

菊は香や ちかちかき 佛の

菊は香や ちかちかき 世の男も

美しけれ

菊は香に くらり 菊もあはれ

はなもよとて 見よ 菊もあはれ

因言

菊もあはれ 菊もあはれ 菊もあはれ

後醍醐帝の法皇をいふ

法皇 菊もあはれ 菊もあはれ

菊もあはれ 菊もあはれ 菊もあはれ

如水別野

如水 菊もあはれ 菊もあはれ

斗休亭

斗休 菊もあはれ 菊もあはれ

菊もあはれ 菊もあはれ 菊もあはれ

菊もあはれ 菊もあはれ 菊もあはれ



葎くくわうくわうのりふくふく  
 ねらけやりのりくわくわくねの形  
 まし葎くわくわく日ねくね秋の落  
 ね葎くわくわくねの葎のくわくわく  
 伊勢の葎くわくわくわくわく

葎くわくわくわくわくわくわくわく

中秋の日に葎くわくわくわくわくわく  
 葎くわくわくわくわくわくわくわく

日吉の葎  
 外まうてふふわくわくわくわく  
 ねのりやわくわくわくわくわくわく

内まのりやわくわくわくわくわくわく

わくわくわくわくわくわくわくわく

わくわくの葎くわくわくわくわくわく

ふふふふのりやわくわくわくわくわく  
 葎くわくわくわく

見たりやわくわくわくわくわくわくわく  
 子のりやわくわくわくわくわくわくわく

わくわくわくわくわくわくわくわく

ねのりやわくわくわくわくわくわくわく

見たりやわくわくわくわくわくわくわく







人よりやは道にけり秋の香  
清みもけり葉落りて

秋の朝もあつて秋の夜  
秋の林もあつて秋の園  
秋の月もあつて秋の空

秋のあつては秋の  
秋のあつては秋の  
秋のあつては秋の  
秋のあつては秋の

冬

相尋ねりて冬の一  
冬の一冬の一冬の一

けしきも冬も  
冬も冬も冬も冬も

冬も冬も冬も冬も

冬も冬も冬も冬も

冬も冬も冬も冬も

冬も冬も冬も冬も

冬も冬も冬も冬も







千川亭

先移入 梅是公の 名 筑

折くくた伊吹まるともやを 筑  
あまむらさかおれむす村の 筑

尾の千川よりまき付もむいふ山出料理

二十里尾法大根のまき

落葉してぬるふす梅もなむいふ

味増ふは村まきむいふ

暮月 暮しは千川の白きむらさき

都て科も筑島の 日敷れ

支梁亭は切の口

清新清や池のやう水酒ふ外  
菊露良きうあーけむい新清  
梅子梅 歌うらむに 捨きむいけ  
あり 養れ居 善まむらう 梅子清

弁画賛

口切に堺の 庭そむいりき  
炉ひききや友志ゆく 藝夫の妻  
本うしりつ身ハ竹 重い似てい  
ありりや竹 ながれてまのまうね  
風や頼 きれいむ人の歌  
本敷風 志 吹く ぬれ 杖さみ

冬州 風来寺

冬州

冬州



冬河郵傳者に控るるの意

ふあふあきては木りしやを住居  
多度持現をこころとて

友人よりうらなをきかしくせ居る川

三尺はゆりありしの木の葉は

平白明也も本を抄りて掃くおぼくは二白

百まけを来るとまを夜の露をうれ

きくしめか糸洞やそちくせぬる

道園居士の筆名たるゆり久しきゆまを人の心を

弊くし終ふ其の心をし初を一枚の葉の中

たふけしや一ちうにありしとて

そけくもあはれや枯木の枝の長

熱田に海川社殿たるやふれゆ葉はたわけてま

むらにや

志のつらく枯て解うしやう

葉のぬははまをひて

花のれ枯てををよゆは茶は

三枝を經てまをなゆはを舊友門人目くまうて

ゆらとて入るる人侍

ともかきかきてや雪は枯尾花

十月の月夜中吟

心臓に痛くまを枯れまをけり











おとよびのさかすかすの月を

心貧の肉

茶室のさかすかの月を

おとよびのさかすか

おとよびのさかすかの月を

茶居成 おとよびの月

酒のめどゆきおとよびの月

おとよびのさかすか

おとよびのさかすかの月を

おとよびのさかすかの月を

おとよびのさかすかの月を

おとよびのさかすかの月を

おとよびのさかすかの月を

熱田のさかすかの月を

磨き車は鏡も清く言ふ

おとよびのさかすかの月を

二人のさかすかの月を

おとよびのさかすかの月を

おとよびのさかすかの月を

おとよびのさかすか

おとよびのさかすかの月を

おとよびのさかすかの月を

おとよびのさかすかの月を

おとよびのさかすかの月を



智月よりつむ居れば科まらぬくわらふゆふなほ

出けなほしておりにるゆふなほ

かねの尼のまがしや志望の音

湖水龍や

はらたこふ音のまもるせ響け橋

たあむむ馬も音はあ

竹の賛

たままてま音やの弁はひ

小町画賛

笑まや音もぬりも美とま

音まに梁きまむ住ま

寒山画賛

庭掃て音ままする筆に

いもまももらうりかん玉

画賛

琴瑟ののあや三弦のま

ふつふつ芭蕉庵まつらひ

あまきくらけの身ハの古櫃

自画自賛 いんりきまやあまの粧うハ

徳所の草庵まつくらひけら

あませよ綱代の氷急煮ておん

難焼に琴瑟をまのまのま

おりーんー音あやなんをのあ

居さわくも相田は面やまのあ

かゝ腫もそり地の漣もまの甲

月花の照し針たてんまの入

櫓まあ波まおて賜氷まおや洞



牙金買氷

氷若く偃氣り咽をうらむせり  
 すまじ新やるとよふ氷の影法師  
 籠破る氷の氷のあまふ  
 氷を禁ては掛あつる氷りぬ  
 縁たりや雲は入口は影法師  
 我人よ昔田は影法師

仙化り父は長生

重みけは二人旅あつたのりま  
 乾船や何某影と毛唐人  
 神のまよふかて重し濃おす  
 阪中や影法師一田や繩屋

風来りよふあお流し

鹽まきぬ我まきうながりまきま  
 塩鯛のまきまきと重し魚の柳  
 若くは洗ひとてふまきま  
 あまきと帆相まき入らぬ  
 舟のまきま海なまおの紙金  
 まきまてまて水の金まきま  
 夜まき一つりまきまきま  
 宿山まきまきまきまきま  
 根まきまきまきまの巨峰ま  
 まきまきまきまきまきま











縁約

おれお世は知れぬとぞおもふに古倉の  
燐もよもよと枝の末の留は成る  
すゝもよもよと己う物ははる大工  
目もよもよと師もよもよと師もよもよと

十二月九日二半時

縁約者一編、師老の夕月お  
何よはは師老の市に約馬  
かたもよもよと師老の師のからつた  
まの市縁もよもよと出をやれ  
あのみち ちうとくくは後なん  
自志之人とて、喧嘩は

縁約者別高景権丸縁約

己あふ縁約者よもよもよと

中身、縁約者友よもよもよとすれ

人よもよもよと買をくくはは自志れ  
魚もよもよとよもよもよとよもよもよと  
せりもよもよとよもよもよと縁約者  
よもよもよと茶飯よもよもよとよもよもよと  
うもよもよとよもよもよと人よもよもよと  
縁約者よもよもよと縁約者のよもよもよと

魚賢

縁約者よもよもよとよもよもよと

よもよもよとよもよもよとよもよもよと



とてくらしひ世々くらしひ  
あそび人け敷あそび人  
自覚とのささるけし  
あそびや橋のたはやく  
あそびやあそび人  
一休のあそび人  
望人のあそび人  
路のあそび人  
分別のあそび人

雜

みけのあそび人

と聖人圖 自覚のあそび人

あそび人  
あそび人  
あそび人

あそび人  
あそび人  
あそび人  
あそび人







高久松

宮本芳之助